

不器用長女も強がり次女もしっかり三女も
うんちが我慢できない!

三姉妹の「大」事件簿

SAMPLE

オリジナル排泄小説集

18禁
成人向け



三姉妹の「大」事件簿
目次

1. 大熊三姉妹 秋のお出掛けとお腹事情	……008
2. 大熊家のトイレは一つだけ!?(一日目)	……076
3. 間違える子供と我慢の一日	……092
4. 大熊家のトイレは一つだけ!?(三日目)	……128
あとがき	……134
奥付	……136

小説 : A J
表紙・口絵イラスト : 青緑

大熊三姉妹 秋のお出掛けとお腹事情

午前五時四十五分。日が昇り、空が明らんで間もない早朝のこと。大熊楓佳は枕元で鳴り響くスマートフォンのアラームで、七時間ぶりに夢から現実へ引き戻された。

カーテンの隙間から差し込む光に覚醒を促され、目を擦りながら楓佳はその体を起こす。秋も深まる十月下旬とはいえ、布団に残る体温が惜しい季節にはまだ遠く、まどろむ時間はほんの一瞬で済んだ。

楓佳の一日はいつも寢床の傍に置いた眼鏡を掛けることから始まる。一步、ベッドから降り素足でフロアリングを踏みしめる。二歩、三歩と止まらず進み自室から廊下へ。レンズの奥の大きな瞳をぱちりと開き、期待に満ちた笑みを浮かべながら階段を下っていく。

「あ、おはようお母さん」

リビングで出迎えた母親は、やや驚いた面持ちで娘を見ていた。

「楓佳、早いね。まだ寝ててもいいんじゃないの？」

「だって、今日はお発遅れたらやだもん。売り切れちゃうかもしれない特盛海鮮なんだよ！」

早起きの理由は食にある。この週末の大熊家の予定は、グルメ雑誌で見かけた評判の海鮮丼を味わうこと。そして日帰りにも関わらず、片道四時間以上を掛けて遠方の漁港町を訪れる弾丸旅行なのだから、早朝の出発は避けられなかった。

「昨日は焼肉をあれだけ食べて、今日は海鮮丼だなんて。ほんとに食べるのが好きね楓佳は」

「ええー、昨日は彩花ちゃんだって、はるちゃんだって、いっぱい食

べてたじゃん。それに、そう言うお母さんだって結構……」

少女にあるまじき健啖さを持ち合わせ、毎日三食おかわりは欠かさない楓佳とて高校一年生。十五歳の乙女である。その大食いを露骨に指摘されれば、文句の一つぐらいい言いたくなるものだ。

「うーん、誰に似たのやら検討もつかないわねえ」

「お母さん、手鏡そこにあるけど持ってこようか？」

母と娘の軽口の応酬もそこそこに、寝起きで乾燥した喉をコップ一杯の牛乳で潤してから洗面室へ向かう。

まず洗顔を済ませ、視線を戻すと、洗面台の三面鏡に純朴で幼げな相貌の少女が映る。ほどよく肉が付き、豊満に熟れた肉体とはいささかアンバランスにも感じられる楓佳の童顔は、胸を満たす「楽しみ」に綻び、一層愛嬌を振り撒いていた。そんな鏡の奥の自身を見つめながら、彼女は寢癖の付いた黒髪を梳いていく。幸い肩の高さに僅かに届かないセミショートのを整えるのにそう時間は掛からない。

歯も磨き終えると、彼女は着替えのために二階の自室へと戻った。開きかけの本に気を取られつつ読み進めたり、お世辞にも片付いているとは言い難い部屋での探し物に手間取ったりで、不器用に時間を浪費しつつも服装を整えていく。長袖シャツの上に薄緑のパーカーを羽織り、ボトムスはスカートとの二択で迷いつつも、この日はジーンズを選んだ。今日は可愛らしさよりも、大きく膨らむことが確定しているお腹を締め付けない格好を優先したに違いない。

自分のせいで出発を遅らせないよう早めの起床だったが、支度は存外早く済んだ。彼女が消化せねばならない朝のタスクは残り一つ。

きゆるる……くるるる……

「んんう〜、んっ、う〜んっ」

みちっ、みちちちち、にちにちにちにちちちっ

楓佳は息むのを止めない。神妙な顔付きを浮かべ、便器へ委ねた全身をこわ張らせ、尻にぶら下がる汚物を押し出していく。快便——その形容に相応しく表面から芯まで身の詰まった大便が、擦過音を撒き散らしながら伸びていく。

ぶりぶりぶりみちちちちっ!! ぼちゃんっ!!

そうして腹圧に押され、重力に引かれ、便塊は末端まで途切れることなく吐き出された。他人に聞かれれば赤面間違いなしの派手な着水音が彼女の鼓膜を震わせ、良好な腸内環境を映した固さと色合いの糞便が薄黄色の湖へと沈んでいく。

「んっ、はぁあ……」

心地良さげな吐息を漏らし、楓佳は快樂に頬を緩ませた。しかし、背筋の伸びたその身から緊張は抜けず、一呼吸の後にまた力の籠もった表情へと立ち返った。

(まだ、うんち出るよね。出掛ける前に、すっきりしておかないと) 彼女の朝の営みはまだ終わっていない。封水の下に沈み鎮座する大便はまさに大きい方と称すべき立派なものだが、これだけでは、楓佳の日々の食事量には全く釣り合わない。

「んんっ……うううんっ んうう〜」

いつもよりも薄弱な便意を捕まえ、緩慢な蠕動を後押しするために、彼女は再び強く息んだ。

「はあっ……ん、うんっ、う〜ん」

その息遣いに合わせて、肛門が隆起と沈降を繰り返す。呼吸のリズ

ムに合わせて腸壁が踊るが、肝心の中身はなかなか姿を見せないでいる。

「ふ、んっ、うんう〜っ……はあっ、はあっ……」

(踏ん張ってるのにうんち出ない……いつもならするする出てくれるのに。朝ごはんまだだから、お腹があんまり動いてないのかなあ) うんちを頑張る楓佳だったが、水の跳ねる音は一発目を出したきり聞かえてこない。快便を誇る彼女も、胃が食物を受け入れたことで起きる大蠕動がなければ、全てを出し切るのに少々難儀するようだ。

「ん、ん、んっ……んんんっ、んん〜っ!!」

大便がしたい。すっきりしたい。その意思と本能を示すように、両手は膝の上で握り拳を作り、上体は僅かに前傾姿勢へ。いつの間にか脚の下にあつたズボンとショーツは脇に迫いやられ、自由になった両脚は大きく開かれていた。

(あっ……来る、もうちょつとで……出る)

「んうっ、ん、んっ、うう〜ん……っ!!」

にちちっ……にちちちぶりり、にちにちにちっ! とぼんっ

みちみちみちっ、ぶりぶりぶりりっ! ぼちゃんっ

声が、水の音が、糞便と肛門が奏でる最低のサウンドが不浄の空間を満たす。善玉菌が圧倒的優勢を誇る健康固形便とはいえ汚物は汚物でしかなく、不快な臭気が濃度を増していく。誰にも見せられない／＼臭がせられない乙女の最高機密がそこにはあつた。

「……んっ、うん、うんん……っ」

ぶりぶりりり ぼちゃ にちちち、にちぶりり とぼ、ぼちゃ……

「っ、ふうう〜……」

やや時間は掛かったが、太ましいバナナうんちに続き、やや短めの塊二つと細切れうんち少々を出すことができた。お腹のむずむずは落ち着いてきた。だから、彼女の安堵と安息の吐息は、行為の終わりの合図……そのはずだった。

(うんち、したくなくなっただけ……でも、すっきりしない感じがする。ちゃんと出せたけど、いつもの半分ぐらい、かな)

便意は消えてなくなつた。並みの少女にとっては、決して少なくない量の糞便を排泄した。しかしそれでも残る小さな違和感に、楓佳は戸惑っている。

朝ごはんをしっかりと食べ、うんちをたっぷり出す。そんな日常からの逸脱。欲求の呼び声は失せたが、決してすっきりとは言い難い。そんなあやふやな感覚が、下腹で渦巻きその主を迷わせた。

(時間あるし、もうちょっとだけ、うーんってしてみようかな)

踏ん張ればまだ出るかもしれない——温水洗浄便座のスイッチに伸びた手が止まる。でも徒労に終わるかもしれない——だから手をすぐ引つ込めるまでには至らない。

「ちよっとお姉ちゃん、トイレまだ終わらないの？ 待つてるんだから早くしてよね！」

迷っている最中、突然外から扉を叩かれ、驚いた楓佳の体がびくりと跳ねる。

「もう、そんなに急かさないでよ彩花ちゃん。一階のトイレは？」

「はるちゃんが一階を使ってるの！ 私だっと思っていたんだから、ゆつたりしないで、終わったなら出てきてよ！」

楓佳には二人の妹がいる。高校一年生の楓佳、中学二年生の彩花、

小学五年生の春香の個性豊かな三姉妹がいつも大熊家を賑やかせる。そして今、扉越しに声を荒らげているのは上の妹の彩花だ。

運動部で鍛えた彩花の肢体はやや筋肉質で、背丈は既に姉を追い抜いていた。ショートカットの髪も、いかにも活動的な少女という雰囲気醸し出す。その端正な相貌は二歳年上の楓佳以上に大人びており、漂う伶俐は心の頑強をも主張して止まない……もともと、今の彼女は眉の傾いた困り顔を浮かべていた。

毎朝快便は三人姉妹の共通項。年齢や性格が違っても、同じ時間に起床し、同じ時間に朝食を取る三姉妹だから、お通じの時間も重なるものだ。故に二つのトイレの両方を先に占領されて、あるいはじゃんけんにかけて、活発な便意を抱えながら待たされる朝も珍しくはない。それは彩花にとっても同じで、慣れたことのはずなのだが、この日の順番待ちはやや落ち着きを欠いている。

(大丈夫……もう出ないよね)

そんな彩花をよそに、便器に腰掛けた楓佳の右手が下腹で円を描く。その手つきはまるで問い掛けるかのよう。

(やっぱり、あんまり待たせるのもよくないよね)

奇しくも同じタイミングで、扉の外に立つ彩花の右手が下腹で円を描く。その手つきはまるで宥めるかのよう。

(それに、彩花ちゃん急いでる雰囲気だったし。お腹痛いのかな?)

楓佳の想像のとおり、彩花は前日の過食と脂分過多でお腹を緩ませている真つ最中。平素よりも強い便意と鈍い腹痛に襲われて、消化不良の柔らかい大便を出したかった。トイレの取り合いと順番待ちが珍しいことでなくても、直腸へ波のごとく押し寄せる軟便に急かされて

は焦燥も無理からぬことだろう。

(もうちよつと気張つてもよかつたけど、一応ちゃんと出せまし)

僅かに抱いた不安を振り払い、楓佳は後始末を開始した。早々に終わらせるべく普段よりも強めに調整された温水が、糞便を放ち汚れた排泄孔に吹き付けられる。尻を動かし姿勢を変え、肛門全体を洗い流し、数秒の後に停止。快便でキレイ良く出せるから、洗浄は短時間のうちに済ませられた。そうして残った湿り気を、重ねたトイレレットペーパーで拭き取っていく。一度目は茶色の残滓が認められたが、二度目は白色しか残らない。そうして為すべきことを終えると、ズボンとショーツを履き直して、彼女は立ち上がった。

(やっぱり、いつもより出た量が少ないなあ。はあ、お昼ごはんの後とかに、うんちしたくないといけど……)

そこでふと自身の摂食の成れ果てが彼女の目に入る。人並みから大きく外れぬその体躯からすれば相応の成果だろうが、便器に山盛りになるまで出してしまふ朝も珍しくはない快便少女からすれば、疑念と不満が残るところ。

ただ、下腹に手を当てても蠕動の気配は感じられない。そして何より、便意を抱えて今か今かと待ち続ける妹がいる。迷いもあつたが、結局すぐに水洗レバーを倒し、楓佳はトイレを出た。

「お待たせっ」

「お姉ちゃん時間掛け過ぎ！ いつも人のことを急かすくせにっ」

待たされた彩花が姉をにらむ。Tシャツ越しに下腹部を撫で擦つていた右手が、楓佳の出ってくるタイミングで後ろに回されたことは、彼女自身だけが知っている。

「もう、仕方ないじゃん。これでも急いだんだよ」

会話を交わし、空いたトイレに向かう足取りも、たつぷりの軟便をその身に抱えているにしてはゆつくりとしたものだ。一刻も早く大便がしたいのは事実。しかし十四歳の少女は強がった。

揃って毎朝快便であるがために、大便の後のトイレに入ることも、大便の後のトイレに入られることも当たり前。姉妹だから、そこにはためらいも遠慮もなく、気にはならない。だがそんな彩花とて、過食という自業自得でお腹を緩ませた事実は姉に知られたくなかつた。

もちろん、出先で腹を壊して止むなく駆け込む知らないトイレよりは、自宅のそれは落ち着ける場所だ。学校で下痢に見舞われて、友人や同級生に遭遇するかもしれないトイレで汚い音と臭いを撒き散らすよりは、はるかにマシだろう。あるいは、風邪や食中りの病的な下り腹を抱え、部屋とトイレの往復を強いられるような具合であれば、恥もかなくなり捨てて親や姉に助けを請うしかないのだが……それでも、できることなら、情けない姿は家族にも見せたくはないと思つてしまふ。大人の自覚あふれる中学二年生なのだから。

(彩花ちゃん、普通にしてたけどお腹大丈夫なのかな？ まあ、そつとしておいてあげよ)

まだまだ子供と大人の狭間にある少女の感情は、楓佳も痛切に理解できる。だから、彼女は何も言わずに、妹の隠しごとに敢えて触れることはせずその場を離れていった。

* * *

ゴロロゴロギョルルル……グルルルウウウ
 (はあ、トイレ、トイレ、トイレ……早くうんちしたいっ)

楓佳と入れ替わりでトイレに入った彩花は、扉を閉じて鍵を掛け、家族にも侵されない一人だけの空間を作り上げると、繕っていた平靜を打ち破った。決壊はまだ遠く、我慢の余裕は十分にあつたが、それでも不調の産物を留めておくのは不快で、眉間には僅かに皺が寄る。すぐに彼女は便器へ接近した。迫る欲求に追い立てられ、足踏みをしながら紐を解き、パジャマ代わりにしているスウェットと、水玉模様のショーツを素早く降ろす。

ようやく彩花は便座に腰掛けることができた。少女らしい丸みを帯びつつも、まだ発育の余地を残した尻が便座に埋まる。姉の残した体温を感じる。まばらながら生えそろうた陰毛と性器が晒される。汚物を留めた肛門が、はつきりと真下の水面を捉える。そして――

「んあっ、ふうううんっ！ んんんっ!!」

ミチミチミチチチチ！ ムリユリユリユッ!!

ブリブリブリニチニチッ、ブチネチネチニチチチッ!!

急速に膨らみ開かれた彩花の尻のすばまりから、茶褐色の大便が放たれる。穏やかならざる便意と、苦痛に染まつた息遣いが織りなす腹圧に押され、怒濤の勢いでまだ形を保った大便がひり出されていく。

「はあああっ ふうう、ふううー……っ」

ブウウー！ ブリミチチチニチチチブリリリリッ!!

そうして彩花は、平素であればゆつたりと時間を掛けて解き放つ固形物をほんの数秒のうちに便器へぶち撒けた。快便少女に相応しい色艶共に健康的な糞便が水底に沈む――

グルグルググキョウウウ……ギョルルルゴロロロ

――けれども少女を駆り立てた熱くて臭くて柔らかい何かは、未だその腹腔に詰まっていた。腹痛は彩花を苛み続け、感じる便意も強烈なままで治まらない。

(うううう～おなか痛い……っ！ うんち、まだ出るっ)

下腹の内に詰め込まれた肉の管を、固体と液体とをぐちゃ混ぜにした流動物が駆け下っていた。ぼこぼこ跳ねる腸壁に押し出され、鳴動と共に直腸を駆け抜け、それらは瞬く間にひくついて止まない肛門へと殺到する。

「ううっ、んっ、ううーん、んんうう……っ!」

ブリブリリリッ、ブチユミチニチチチッ！ ブリユリユリユッ!!

ブリブリブチユルブリリリッ！ ブチユルルユルルルルッ!!

そうして休む間もなく彩花の尻穴は黄土色を吐き始めた。それは消化不良としか形容しようのないペースト状の軟便――緩んだお腹の産物が弾け飛び散り水面と陶器を汚染する。

「ふううう……んっ、ううーんっ」

ニチニチネチチチ、ブチユルルルッ!! ブウウ……ブリリリリッ!!

ブリユブリユブピュルルッ！ ミチニチニチブチユルルッ！

繰り返される重たい息もと汚い音は扉の外にまで響いた。空間に残り漂っていた楓佳の健康うんち臭も、酸気を含んだ刺激的な悪臭で上書きされ、もう残ってはいなかった。

(ううう、やっぱりお腹緩んじやってるっ、お腹痛い……これ、どう考えても昨日焼肉を食べ過ぎたせいだ……)

「くっ……ん、んんっ……んんううっ」

ブジュルッ、ブリリリブリブリッ！ ブリュ、ブリュリュッ！

両腕で腹を抱え、前傾姿勢で力を込めて、彩花は粘つく軟便をひり続けた。腸管で吸収しきれなかった肉の脂をたっぷり含んだ未消化うんちが止まらない。

(ゆっくり食べようって気をつけたつもりだったのにっ、大食いのお姉ちゃんみたいな食べ方はしないようにしてたのに……っ、トイレ急かしちゃったけど、お姉ちゃんにバレてないよね……?)

父親が『大きな仕事が終わったから』と話し連れていってくれた焼肉店での食事が脳裏を巡る。並の少女よりはよく食べる彩花だったが、楓佳のような頑丈な胃腸は持ち合わせず、過度の刺激によってお腹を緩ませたり、下してしまうことも時にはある。まだ小学生の頃に、食べ過ぎが原因の下痢で大失敗をしかした彩花は、いつも腹八分目を心がけているのだが……食べ盛りの食欲に正直な日も決して珍しくはない。ましてや焼肉というごちそうを前にして、箸が進まないわけがなかった。結局、姉とそう変わらないペースでお肉を頬張り、ご飯のおかわりまでしてしまったというのが正直なところである。

「んっ……はああ、ふううん、んんうう……っ！」

ニチネチチッ、ブピッ、ブリリッ！ ユルルルルッ！

幸い下痢という症状にまでは至っていないが、次々に吐き出されるべとべとの大便は過食の反動そのものだ。寝起きから感じていたお腹の重さと不快感のせいなどでなく、身支度中に急激な便意を催し、着替えも済ませぬうちにトイレへ向かわざるを得なかった。

ギュルルル……グルルルキュルル……

(……うっ、まだ、出るっ)

「んんううっ！ ううう……うううんっ！」

ブリュリュッ！ ブジュルルルブピッ！ ニチヂッ！

急激な腹痛に駆り立てられ、歯磨きを途中で放り出してしまったほど。そんな腹の下りに目を細め、差し込む痛みに呻きながら、彩花はゆるいうんちを繰り返して便器へと注いでいく。

「ふううーっ、ふうう……ふううんっ！」

ブピッ！ ブブッ、ブウウウ

(なかなか治まらない……お腹渋ってる感じ。でも、出発前にちゃんと出し切っちゃわないと)

「んんんっ！ んっ！ うううん……っ！」

……ブピピッ！ ニチヂヂブピュルルルルッ！！

ブピィィ〜ブチチチニチュチュ……ニチネチネチブリリ……ッ溜水が茶色一色に染まり、底が見えなくなっても彩花の緩みきった排便は続いた。

……途中、腹の渋りと重い息みを繰り返して、痛みと欲求を全部吐き出すのに十分近い時間を費やしてしまった。

(はあ、やつとお腹が落ち着いた。もうちょっと、だけ)

「んんっ……ん、うんっ、ん〜っ」

ブリュッ、ブリ……ブ、ブピュッ……ピチッ……ブウウッ！
泥状にまで緩んだ黄土色の大便を出し切って、そして少女らしからぬ汚らしい放屁を最後に彩花の尻は沈黙を迎えた。

「ふっ、はああ……」

腹痛と便意を解消し、軽くなった大腸の寄越す爽快感に、心地良さ

げなため息をつく彩花。ゆるゆるうんちをたつぷりだして、おなかすつきりのおんなのこ。

（お腹痛かったけど、ピーピーの下痢って感じじゃなかったし、早めですつきりできてよかった。お腹壊したままだったら、せつかくの海鮮丼もあんまり食べられなくなっちゃうから）

姉と同じく彩花も今日の小旅行を楽しみにしているからこそ、消化器官の不調を出発前に解消できて安堵している様子だ。

（もう大丈夫だよな？ 早くお尻拭いて、トイレ出て着替えちゃおっ）それから十数秒の間、背を便器のタンクに預け、不快から変換された快の余韻に浸った後、出発が迫ることを思い起こし、彩花は温水洗浄便座のスイッチを押下した。

* * *

——それは楓佳が小さな不安を抱きながらも排便を終えた直後。彩花が軟便を出し終え温水洗浄便座を起動させる五分十五秒前のこと。

「あつ、はるちゃん、おはよう」

「おはよう、ふうちゃん」

姉たちと同じく大便を済ませて一階のトイレを出た春香は、二階のトイレでの行為を終えて階段を降りてきた楓佳と鉢合わせた。

ちょうど春香は扉を開けたところで、お互い向き合い朝のあいさつを交わすために手を止めた。扉をまだ閉めていない。だから、先程まで彼女が尻を向けていた便器が、その発育途上の体の奥に見えている。次なる洗浄に備えタンクに水を湛える流水の音もよく聞こえた。そし

て、僅かに廊下へと漏れた春香の便臭をも嗅ぎ取ることができてしまふ……もつとも、妹の便臭が残るトイレで大用を足すことは日常茶飯事で、楓佳が顔をしかめるようなことはない。姉妹だから許せる。お互い様と許し合える。

「はるちゃんも、もう着替えたんだね」

「うん、ふうちゃんの方が早起きだったけど、わたしも少し早めに目覚まし掛けてたから」

漂う臭気にかが付いたのか扉を閉めて、春香は平素と変わらぬ穏やかな声色で話した。姉に言及されたとおり、既に春香は着替え終えて出発の準備ができていた。羽織ったクリーム色のカーディガンはやや厚手で、その下はチェック柄のスカート履きであるが、脚は黒色のタイツが覆っている。肌寒さを感じる日も珍しくはなくなった季節だからこそ、抜かりなく対策をしていることが分かる出で立ちだ。ストレートの二つ結びもその器用な手先で綺麗に結われている。

「そういえば、彩花ちゃんはまだ着替えてなかったけど出発時間大丈夫かな？ 私と入れ替わりでトイレ入っちゃったし」

「あ、もしかしてふうちゃん、あやちゃんに早めに譲ってくれた？ ありがとう、あやちゃんも急いでたのに、私じゃんけんで勝って先に入れてもらっちゃったから」

トイレの順番に年功序列はなく、公平な手段で決するのがルールであって、末の妹だからと遠慮をする必要はないのだが、春香は二人の姉への感謝を忘れない。そんな些細な会話からも、彼女の優しさと人の良さが伺えた。柔らかに愛嬌溢れる顔付きから、まさに想像される内面を持ち合わせている。

「あつゝ全然気にしないで。彩花ちゃんに急かされちゃったけど、ちよ
うどわたしも出るところだったから」

楓佳もお腹の具合に迷いがあつたことは敢えて言わない。小学五年
生の妹に罪悪感を抱かせたくはなかつたから。

「そっか。やっぱり、あやちゃんもお腹ゆるくなつたのかな」

鈍感な楓佳ですら薄々彩花の具合について気付いているのだ。器用
で気遣い上手で姉へのフォローも欠かさないよくできた妹も、やはり
姉の不調を見逃してはいなかつた。

「まあ……彩花ちゃん昨日はたくさん食べてたもんね」

そして鈍感な楓佳だから、無意識のうちに春香がこぼした言葉の裏
側には——実のところ、彩花と同じく春香もお腹が痛くなって、つい
先程まで緩んだ大便をしていた事実には気付かない。

三姉妹の末っ子で、一番年下の小学五年生ながら、姉の楓佳や彩花
よりも節制ができて、腹八分目を守るいい子の春香。けれども、肉
奉行のお父さんが次々に焼いてくれる焼肉というご馳走に舌鼓を打
てば、やはり姉たちと同じく少しばかり「わるい子」になってしまう
もの。そして、満腹の一步先まで摂取した牛肉の脂は、十一歳の女兒
が持つ消化管には、やや刺激が強すぎた。

目覚めた時から不調は自覚していた。目覚めてすぐ臭いおならが出
た。だから、朝一番のおしっこついでに踏ん張ってみたものの、出
せたのは刺激臭を伴うガスばかり。一旦は諦め、鳴動する腸管に気持
ちの悪さを覚えながらも身支度を済ませた。そして、靴下に脚を通し
着替えを終えたタイミンで春香は催したのだ。

鈍い腹痛。柔らかいんちがしたい。お腹がぎゅるぎゅる鳴って

る。きつと焼肉の食べ過ぎだ——すぐに状況を理解した小学五年生の
少女は、右手で下腹を撫で擦りながら、トイレへと引き寄せられた。
だが二階は上の姉が使用中で、一階に辿り着いたのは下の姉と同時。
幸い、お腹を緩ませた子同士の対決を制し便器にありついた春香は、
まだ未熟な尻を鳴らしながら、ねつとりとした大便を吐き出した。一
生懸命息んで、時間を掛けてうんちを出して、大小腸の不調を解消し
今に至る。

「ふうちゃんはお腹大丈夫？ たくさん食べてたし」

自分も彩花も不調を起こしたから、もしかしたら一番多く食べてい
た楓佳も、という発想は自然に生まれる。何より、自宅以外での排便
を恥じらい、中々トイレを言い出せない姉が、移動の車中でお腹のピ
ンチに陥ることが、春香には心配だった。

「あ、うん、わたしは全然大丈夫だよ」

自身の大用の事情に言及され、少しどきまぎしながら楓佳が答える。
僅かに違和感はあるが、正しく健康的な大便を出せたのは事実だ。
「ならよかつたね。ふうちゃんは特盛食べちゃうんでしょ？」

「うん、せっかくだから一番大きいの食べたいよね」

今朝は三姉妹で唯一だった快便少女は、まだまだ元気いっぱいの様
子である。

「あ、お姉ちゃんはいいかもだけど、あやちゃんが対抗して無理しよ
うとしたら止めてあげてね。あやちゃんもよく食べるけど、ふうちゃ
んほどじゃないんだから」

恥ずかしがりの長女を気遣いつつ、負けず嫌いな次女への配慮も忘
れない三女はまだ十一歳。年齢の割に大人びていると、しっかりと

いると言われることは多かつた。

そうして二人の少女はすぐ傍のリビングへ歩いて行く。ダイニングテーブルには、平素であれば皿の上に乗っている色とりどりの朝食が、重箱の中に入っていた。その内容も、おにぎりや唐揚げなど手や爪楊枝で食べられるものがほとんどだ。

「たまにはこういう朝ごはんもいいねお母さん！ はあ、お腹空いてきちゃったし、早く食べたいっ……ねえ、味見してもいいかな？」

間もなく出発し、車中でそれらを味わう予定だが、楓佳は待ちきれないと言わんばかりの表情で目を輝かせている。その様子はまるで遠足を前にした幼子のよう。実態は、二か月後に十六歳を迎える女子高生なのだが。

「ふうちゃん、先に食べちゃったらあやちゃんが怒るよ？」

そんな姉を諫める春香だったが、数分前とは別の理由でお腹が鳴ったことは秘密にしていた。

「まあ、いつも喜んでくれるのは嬉しいけどねえ」

家事というよりは趣味として、いつも料理に全力を注ぐ三姉妹の母親も得意げだ。

出発の準備が整いつつある。間もなく父親が合流し、そして最後に現れたのは、トイレを済ませ支度も終えた彩花だった。

「じゃあ、いよいよ出発だね」

大熊家の三姉妹と両親が玄関に集う。出発時間の直前まで寝間着姿で用便中だった彩花も、今を時めく十四歳の少女に相応しい格好になっている。シャツの上に羽織ったデニムジャケットも、黒色のハ

フパンツも活発な彩花らしい。そして、十分丈のパンツスタイルの楓佳や、スカート姿ながらタイツを穿いた春香とは異なり、おしゃれ優先の彩花は、適度に日に焼けた肌色も、やや筋肉質な生の脚を晒していた。

日帰りの旅ということもあり、準備は各々の手持品と、車中での朝食の用意ぐらいで、持ち物らしい持ち物もないのだが、大切な準備はそれ以外にも存在していた。三姉妹の母親が、その長女の顔を見つめ問い掛ける。

「楓佳、ちゃんとトイレは行ったの？」

「えっ？ あつ、うん……って、なんでわたしだけ聞くの!？」

まだ小学生の妹すら差し置いて、真っ先に母親から車中でのトイレを心配される高校生——楓佳。

「だって楓佳ったら、この前も急にトイレ行きたいって言い出して大慌てだったじゃない」

外で済ませられないのは大便だけかと思いきや、小用も自宅で落ちて着いて済ませたいと思うことがままある幼児じみた楓佳のことだ。つい先日、止められたにも関わらずファーストフード店で一番大きなサイズのドリンクを飲み干し、結果母親の運転する車中で、我慢してしまっていた尿意の緊急事態を告げ、慌ててコンビニのトイレに駆け込んだばかりだった……それゆえ、母親の指摘にも反論しづらかった。

「高校生にもなってまた携帯トイレ使うとかやめてよね」

「もうっ、彩花ちゃんまで言わないでよっ。あ、あの時は、ほら渋滞だったし、それに三年も前のことだしよ」

彩花もやれやれと言わんばかりに過去の失態を持ち出してきた。鈍臭く、不器用で、口下手な姉とは違おうと自意識を持ち、一緒にされたくはないと姉を否定し、つい下に見てしまう彩花がいる。事につけてからかかってしまう。決して楓佳を嫌うわけではなく、姉妹の仲は良好で、二人だけで出掛けることすらある。それでも、そのような態度を取るのには、生来の気の強さや意地か、姉離れしたい年頃ゆえの反発心が悪戯心か、あるいは親愛の裏返しか。

母親と妹からの仕打ちに不満げながら、とはいえ未だ楽しみに頬を綻ばせたままの楓佳も含め、一家は予定どおりの時間に自家用車へ乗り込み、無事に出発することができた。

* * *

「ん〜、このサンドイッチ、王道の美味しさ。大好きっ」

目的地へ向けて走行する車中で、妹二人に挟まれた後部座席の中央に座った楓佳は、ベーコンとレタスとチーズがたっぷり入った特製サンドイッチを、こぼさぬように大きく口を開けて頬張っていた。

出発前にはお預けとなった大熊家の朝食である。いつもの朝食と同じく母親の手作りながら、いつもとは異なるメニューに心を躍らせた楓佳は、エンジンが唸り車が動き出してすぐに重箱に手を付けてしまったほど。料理としての完成度もさることながら、非日常の特別感と旅への期待が良い味付けになっていた。それは彼女の屈託なき笑顔が証明している。

「うん、いつもどおり美味しいけど……お母さん、これちょっと多く

ない？ これから海鮮丼食べに行くんだよね？」

一方彩花は、だし巻き卵や唐揚げを次々につまみながらも、やや眉をひそめて問い掛ける。たしかに決して小さくはない重箱にぎっしりと詰まった料理の数々は相応の重量感がある。ましてや旅の主目的が数時間後に控えた昼食なのだから、彼女の指摘はもつともだ。おにぎりを少しずつ食べる春香も似たような視線を送っていた。

「えっと、ほら、何作ろうかなって考えてると楽しくなってきたって、つい作り過ぎちゃうって、あるじゃない？」

三人の子の母は、娘の指摘に視線を泳がせつつも、まるで自分は悪くないと言わんばかりの口ぶりで答える。料理の腕は一級品ながら、自由奔放な性格らしい。

「あ、うちの調理同好会もみんなそんな感じかも。気持ち分かる」

そう語る楓佳は、冗談めかすわけでもなく真顔だった。

「お姉ちゃん、お母さんが調子に乗るからやめてよね」

マイペースな母と姉に対して困り果てたと言わんばかりの彩花がいる。そんなやり取りに、春香も、運転中の父も笑っていた。

「ほら、あやちゃん。一応保冷剤もあるから、いざとなったら帰りとかに食べられるよ」

会話を受け、おおよそ楓佳の答えは分かっていたが、あくまで念のために春香は提案してみた。

「でも、万が一悪くなったらいけないし、それにまだまだ全然食べられるって」

そして春香の予想どおりの言葉が返ってくる。多少の作りすぎなど、楓佳の留まることを知らない食欲からすれば些事にすぎず、平素から

しろ、楓佳は少しばかり我慢をしてしまった。それを物語るに相応しい勢いの放水であった。

擬音も、黄色の跳ねる音も止み、間仕切りで囲われた楓佳一人の空間を沈黙が支配する。

(少しづつ出せば、聞こえないよね……におい、大丈夫だよね?)

そこから先の行為には、楓佳が更なる汚辱に至るには、ほんの少しだけ勇気が必要だった。数秒の後、彼女は擬音装置を再び起動させる——時を同じくして、尿道口から少し離れた孔がびくりと動く。彼女が車中で我慢していたものは、もう一つだけあった。

「つ、んっ……………ふっ」

ぶびっ、ぶ、ぶすすすっ、ぶぶっ、ぶすっ、ぶううう……………

そうして楓佳は、力加減の微調整し音を極力抑えながら、腸管の内で渦巻いていた気体を秘めやかに放出した。

「っ、はああ……………」

(おなら、いっぱいしちゃった……………っ、隣とかに聞こえてないよねっ)

ただの放屁といえど、それは恥ずべき茶色と隣り合わせの行為である。排泄の為される不浄の場とはいえ、臆病な楓佳のことだ。たとえそれが名も顔も知れぬ不特定多数であったとしても、他者の存在を意識するだけで気が気ではなくなる。

きゅるる……………ぐう……………こぼほ……………

そして、恥ずかしいガスを解き放った楓佳のお腹は、まだ名残惜しそうに震えていた。色白の肌の奥底で、管の内壁がゆっくりと波打っている。胃から大腸に至るまでの消化器全体が、小さく収縮と弛緩を繰り返している。

(お腹ちよっと動いてきちゃった。おならしたくなかったのも、そのせいでよね。やつぱり朝ごはんたくさん食べたからかな……………大丈夫、うんちはしたくない。今はしたくない、けど)

既に排便を済ませているから、朝食の刺激が起す大蠕動といえど、便意の引き金にはなり得ない。だが、健康で健全なその体には、朝ごはんをたっぷり食べた後にするべきことが刻まれていた。そのために欲求には至らぬ違和感と、述語不在の出したいがずつと楓佳の脳裏にまとわりつく。いつの間に忘れてしまえるかもしれない、しかし消し去ることも難しい感覚が意識と無意識の境界に浮かんでいた。

(……………奥の方に溜まつてる感じがするし、ちよつとむずむずしてるし、じゅくり気張つてみたら……………うんち出るかも)

光るレンズに楓佳の下腹が映る。決して肥満とは言いが、ほんの少しばかり余分な脂肪の付いてしまった少女のおなか。その奥底を彼女自身が見透かしている。困惑と迷いを含んだ表情が物語るとおり、腸管の蠢きはこの場所であるが故に加速する。それこそ、この感覚をじゅくりと育てていけば排便に至るであろうと確信するほどに。

(っ、でも、こんな人の多いトイレで、するなんて、絶対嫌だし……………ちゃんと出掛ける前に済ませたんだから、わざわざこんなところで、しなくてもいいよね)

比較的道路の空いている朝方とはいえ、無数の人々の利用するサービシエリアのトイレは出入りが多く、両隣の個室もいつの間にか埋まっていた。得体の知れない誰かの音もまた耳に入り、その繊細な心を揺さぶっている。

生来の臆病と引つ込み思案を抱え、そしてかつて学校での排便を手

酷く揶揄されたトラウマを未だ引きずる楓佳のことだ。叶うのであれば、大便是唯一落ち着ける自宅のトイレでいたい。目尻に涙を浮かべ、他者の気配に怯えながら、息を殺して踏ん張ることはしたくない。だから、学校や休日のお出掛けの際にしたくなくても、もじもじとそわそわを繰り返しながら我慢を通そうとする。ましてや、まだ便意を催してすらいらない状態で、どうして茶色を晒す覚悟ができればよいか。

(うんち、今はしたくないし……もう高校生なんだから、本当に我慢できなくなったら……トイレ、行けるもん)

無論、我慢に我慢を重ねても着衣のままに脱糞する未来しか見えなくなれば、きつと至近の便器に縋れる。本当にどうしようもないときには、恥と恐怖を飲み込んで大便をしないとイケないから、心を奮い立たせ勇気を振り絞れる……そうやって胸の内を釈明を重ね、楓佳は最善を遠ざけた。『トイレは行けるときに行きなさい』と幼稚園児だつて教わるというのに、高校一年生の彼女にはそれができなかった。過信と不運が重なり、道半ばで限界を迎え、無様に膨らませた下着は一枚や二枚ではないというのに、未だこの幼くて拙い少女は恥の心を優先してしまふ。

そうして楓佳はそれ以上の思考を止め、小水によつて濡れそぼつた秘所を拭き始めた。立派に生えそつた陰毛にも多くの滴が及んでおり、下着に恥ずかしい染みを残すことのないよう丁寧な手付きで紙を押しつけていく。作業を済ませると、ジーンズとショーツを穿き直し、水を流してその場を立ち去つた。

くるる………きゅるる………
それでもまだ便器は彼女のほんのすぐ傍にある。今、化粧台で手を

洗うのを中断し、再び個室へと舞い戻れば、未だ残るお腹の違和感を解消させられる。家族を少々待たせしてしまうかもしれないが、ここで大便を出せる。不意の欲求に怯えなくても済む。まだ間に合う。

(大丈夫、だよな?)

しかし、迷いが深まり決断が揺らぐその前に楓佳は歩き出す。樂觀と慢心を胸に、かすかな蠕動を腹腔にそれぞれ抱えたまま、排泄の許された場所を後にした。後悔はいつだって先に立たないというのに。

* * *

「えっと、ちょっと待って」

「どうしたの春香」

十数分の休息を終え、再び出発しようとする一家の足が止まる。視線と意識が三姉妹の末っ子——春香に向けられる。

「その、もう一回、トイレ行つてくる……」

春香の主張は「休息」の延長。その理由は、言い淀みながらも紡がれる片仮名三文字によつて余すところなく主張された。

「大丈夫? お腹痛くなつちやつた?」

それに呼応して、彼女の母親が優しく言葉を返した。父親も二人の姉も同様に、少々の驚きと心配の目つきでまだ幼い娘を、小学生の妹を見つめている。

春香もこのサーピスエリアに到着した直後に、姉たちと同様におしっこを済ませ膀胱を空にした。故に直接の言葉は無くとも、二度目は大用だと理解されるのは当然のことだ。それに家族の距離感では、

大熊家のトイレは一つだけ!? (一日目)

特別なことなど何もない朝……そのはずだった。記念日でも、忌むべき日でもない、十一月初旬の平凡な平日の朝であるはずだった。事実、大熊家の三姉妹は概ね同じ時間に目を覚まし、脱衣室の洗面台を交代で使って顔を洗い、そして朝食を取っている。今朝は鯖の塩焼きとほうれん草の煮浸し、味噌汁と白飯が供され、少女たちの胃袋を満たした。小学五年生の春香も当然この朝ごはんを完食し、一日の始まりに必要な活力を得ている。

学校の準備は前日のうちにしておく優等生な春香だから、朝の支度も手早く済ませられた。着替えも終えて小さくかわいらしい女の子が姿見に映る。今日は胸元にポップな英文字の書かれたトレーナーと、スカートを組み合わせたコーディネートだ。

身支度の済んだ姿を確認してすぐに春香は自室を出た。二つ結びの髪を揺らしながら廻り階段を降り、向かう先は一階のトイレである。部屋のすぐ傍にある二階のトイレは敢えて素通りしていた。

(よかった、今日もわたしが一番乗りかな?)

錠前の表示は青色で先客は無く、扉を開くと真つ正面に洋式の便器が春香を出迎えた。まだ幼げで柔らかかな、愛嬌溢れる顔付きをした春香にも、排泄という影が付きまとうもの。身体活動の帰結として産生される老廃物を処理するために、トイレが必要なのである。事実、今日も既に朝一番の排尿を春香はしている。諸事情により、姉妹で一つの便器をかわるがわる使って、各々就寝中に溜め込んだ濃縮おしっこを放流したのだ。

(お腹も動いてきた。うんち、ちゃんと出せそう)

だから、当然次は大用であった。茶色をした摂食の成れ果てを排泄したかった——春香は大便をするために便器と向き合っている。

(今日は早めに済ませないと。ふうちゃんもあやちゃんも、多分すぐに来ちゃうもんね)

迷うことなく施錠をし、二歩進むと今度は反対に便器へ背を向けた。水色のブリッツスカートを脇に挟みつつ、穿いているジュニアショーツをくるぶしまで降ろし、まだ未熟で小振りな尻と無毛の縦筋を晒す。そして春香は便座に腰を下ろし、ちょこんと座る。素肌を便座へ触れさせ、排泄の準備を整えた。

「んっ……」

空っぽだった胃袋が、投げられた食物に強く刺激され、消化のための運動が管の末端まで及ぶ、大蠕動という生理現象。朝食後のそれは一日でも最も力強く、排便には最適のタイミングとなる。だから、姉たちと同じく春香も朝にうんちをする。小学校に上がって間もない頃に、毎朝そのための時間を意識的に取り、便意が無くても五分はトイレで息むことで、気付けば身に染み付いていた習慣が今もなお続いているのだ。

「ふっ、ん……んうう」

息む。年齢相応の幼さを持った柔らかな相貌を僅かに強張らせ、穏やかに息む。それに合わせて、直腸で留まる固形物が動く。尻の中心点にあった皺の集まりから、肉の門が隆起し現れる。幸いそう強い力を込める必要はなかった。

ぶっ、ぶうう〜

「はふ……っ」

ガスが放出され腹圧が抜けていく感覚に、思わず息が漏れる。ここは自宅のトイレだから、音を響かせても恥じらうことはない。

「ん、ん、ん……」

みちっ……みちにちにちっ……! !

換気扇の音だけが響く空間に、かわいらしい息遣いと、かわいいはずがない汚辱の音が響く。開け広げられた春香の穴から、茶色い何かを姿を現した。

「う、んんうん……っ! !」

みちみちみちちちにちにちっ! ! どぼんっ!

そして込められた腹圧に引かれ春香の快便うんちが伸びていく。軽い息みだけで、便塊はするとひり出され、末端まで途切れることはない。そして重力に引かれ便器へ落ちると、小気味いい水音と共に底へと沈んでいった。

「ふうう……っ」

(今日もバナナみたいなうんちがつるんって出た。お腹が健康な証拠だよ。よかった……)

ひび割れは控えめで滑らかな、硬過ぎず柔らか過ぎずの至極健康的な固形便であった。明るい茶色も彼女の良好な腸内環境を映し出している。便秘も下痢も珍しい、毎朝自然にすつきりできる快便少女に相應しい成果物だ。

そして原初の快が春香を優しく包む。糞便を秘めていたお腹が得も言われぬ爽快感に包まれ、可憐な少女の頬がほぐれた。

「あつ、彩花ちゃんも、これからトイレ、だよね? !」

「はあ……同時だからじゃんけんにする? !」

そんな中、階段を降りる二人分の足音の後、春香は姉二人の声を乗り越しに聞いた。今まさに春香が使っているトイレを、次に使う権利を争おうとする楓佳と彩花の会話である。

高校生の楓佳も、中学生の彩花も、小学生の春香も朝のルーティンはあまり変わらない。そして大熊家自宅のトイレは各階一つずつの計二箇所。三引く二の答えが示すとおり、本来あぶれて我慢を強いられるのは、両親が使うタイミングが平素とズレない限りは、三人の内の一で済むはずだった。

「これどつかの誰かが二階のトイレを詰まらせたせいなのに」

「その、それは、ごめん、だけど……」

しかし今は、二階のトイレは詰まっしてしまいがちであった。糞便はおろか水すら流すことはできず、とても使用に耐える状態ではない。それ故に、この姉妹は、一つのトイレを譲り合い取り合い使うことを余儀なくされている。

彩花が責め立てるとおり故障の原因はおつちよこちよいな楓佳にある。彼女が二階のトイレで用を足し水を流すのと同時に、うっかり手を滑らせ落とした高吸水性高分子が便器を詰まらせてしまった。これが昨夜遅くの出来事である。取り急ぎ、日が明けた今日には管工事業者に連絡をする予定であるが、復旧にどれほどの時間が掛かるかは分からない。少なくとも市販のラバーカップでは歯が立たなかった。「二人ともごめんね。うんちしてるから、もうちょっとだけ時間掛かるかも……」

唯一の便器を占領している自覚はある。便意を催した姉二人を待た

せていることも扉越しに理解する。大食い故に朝には強めの欲求に見舞われがちな楓佳が、その童顔を曇らせている様は想像できた。彩花の端正な相貌は乱れないが、無意識に小さく足踏みをして『うんちがしたい』を晒してしまっている姿は幾度か見たことがある。姉思いでいい子の春香だから、すぐに譲ってあげたいと思うのだが……。

くるるるる……きゅうううう

(待たせちゃって申し訳ないけど……まだ、うんち出そうだから)

欲求が彼女の後ろ髪を引いていた。毎朝習慣付けられた大腸の蠕動は止まず、お腹もむずむずしている。だから時間が掛かるということを……うんちがまだ出そうだということを、姉たちに告げるほかなかった。

「ふっ、んん……んんううっ！ うううんっ」

健康なお腹の動きに任せてじっくりと息んでもよかった。便秘知らずの春香はそれでもすっきりうんちができるのだから。けれど姉たちを長く待たせたくはないから、声を上げ、強く腹圧を込めて大便をひり出そうとする。茶色に汚れた肛門が何度も何度も膨らんでは萎む。

「うんっ……うんんっ……んんんっ……！」

ぶりぶりにちちちっ ぼちゃっ

やや小さめの便塊が、肛門の収縮によってねじ切られ、便器に落ちた。毎朝快便の少女として、お腹の調子は日によってそれぞれで、太ましいものを一気に吐き出せる朝もあれば、大小腸がお寝坊をして中々出し切れない朝もある。この朝の具合は、やや後者寄りなようだ。

ぐるるるっ……ぐうううう

(あっ、お腹動いてきた。うんち、大きいのが降りてきてるっ)

「ふううっ、んっ うんっ。うーんっ」

大人びて落ち着いた雰囲気春香とまだ十一歳のおんなのこ。そしてここは無防備が許される自宅のトイレ。

めちっ、にちにちにちちち……っ！

だから、すっきりうんちを出すために、甘く一生懸命な息み声を扉の外にまで響かせるのも仕方がなかった。そして頑張る春香の大きな成果が伸びていく。

「うんんううううっ！」

ぶりぶりぶりぶりりにちちちっ!! ぼちゃんっ!!

粘膜を擦り滑る音を——うんちの音をたくさん撒き散らし、春香は腹腔に詰まっていた一塊をひねり出した。茶色がまた濁った水面の下へ沈んでいく。

「はああうう」

(また大きめが出た……でも)

全身が脱力する。神妙な顔付きが元来の柔和を取り戻す。それでも春香の尻穴は便器を捉えたまま。

「……お姉ちゃん、やっぱりじゃんけん弱くない？」

「う、運なんだから弱いとかないよ……うう、こんなときに一番最後。バスの時間とかもあるのにな」

(ふうちゃん、あやちゃん、ごめんね。もうちよつとだけ……うんちさせてね)

ふと覗き込んだ便器の中には一日分と言っても差し支えない量の大便があつたが、それでも春香のお腹は「あともうひと踏ん張り」を誘っている。二人の姉も朝の日課に急かされる身だとは分かっても、

便意の解消は未っ子にとつても重要事項。出掛ける前にちゃんとすっきりしたいのは春香も同じ。

「ふんっ、ん……っ！ うんっ」

便器の上でお腹を曲げた前傾姿勢になる。両足にも力が籠もる。腹腔に残る糞便を出し切ろうと再び息む。

「んんううっ！ ふんっ！」

ぶっ、ぶすっ、ぶううう

健全な大腸が、少女の意思に促されその蠕動を強めた。確かな感覚が下腹からお尻に至るのを、彼女自身も感じることができた。そして、

「んんんっ！ うんっ、ん、んんっ！」

ぶりりりっ ぶりぶりにちちっ にちゅにちゅむりりっ！

にちちちちむりゆりゆっ！ おちゅ、にゆるるる……っ！

細めになった茶色が連続して落ちていく。やや柔らかめの黄土色が溶けて崩れて溜水を汚染する。

「ん、ふうう……」

寄せる「すつきり」の感覚に浸る春香。便意は収束し、膨らみ開け拡げられていた排泄孔も萎んでいった。

(すつきりだけ……ちよつとだけ、お腹へんな感じ、するかも)

排泄の欲求を解消できたように思えた春香だが、出し切った快の奥に小さな違和感が未だ居座っているのを感じていた。これはお腹の目覚めがよくない時に稀にある感覚だ。籠もって、息んで、うんちが出ることもあれば、気のせいに過ぎず時間の浪費で終わることもある。貴重な朝の時間を費やし排便を継続するか否かで春香は迷った。

「はるちゃん、そろそろ終わるっ？」

「ちよつとお姉ちゃん、まだしてるんだから急かしちゃだめでしょ！」
ただ扉を隔てたすぐ近くで、待っている二人が居る。楓佳に至っては、ここから更に彩花が行為を終わらせるまで待たなければいけないのだ。明白な便意があるのならばともかく、ただの違和感のために踏ん張ってはられない。優しい春香にはできない。

「すぐ出るから待ってね」

春香は平素より強めの温水で数秒間だけお尻を洗った後、残った汚れと水気を紙で拭いた。下着も穿いてスカートを整え、そして自身の排泄物を下水へと流す。便器横にある手洗器で紙越しに肛門へ触れてしまった手を清めると、すぐに春香は扉を開いた。

「お待たせあやちゃん」

「全然大丈夫だよ、はるちゃん」

じゃんけん勝負で勝利し、次にトイレを使う権利を得た彩花が扉の前で待っていた。彼女の通う中学校の制服は、紺のセーラー服。古めかしくも清楚な雰囲気があり、大人びた顔立ちの彩花にもよく似合っている。

しかし彩花が脚を向ける先には便器がある。春香が大便をしていた洋式の便器である——彩花も同じく大便をする。清純を主張する紺色に身を包もうと、上品な臙脂色のタイが胸元を彩ろうと、彩花はこれから茶色を晒す。朝食後の健康的な日課は彼女も変わらない。

「ふうちゃんも大丈夫？ 時間掛けちゃってごめんね」

「あつ、うん……でも、わたしが二階のトイレ壊しちゃったせいだし、それにじゃんけん負けちゃったし」

楓佳は扉の前から離れ、対面の壁に寄り掛かり待っていた。ジャン

パースカートは高校の制服で、秋冬はこの上にブレザージャケットを羽織るのが正しい着こなしだが、まだ登校前ということもあり、ジャケットは自室に置きっぱなしにしている。

楓佳も当然トイレの順番待ちであった。先着順で春香に負け、そして公平な勝負で彩花に敗北を喫し、妹二人が済ませるまで便器にありつけない。健全で乱れることのないお腹ではあるが、普段からたくさん食べる分だけ朝の排便欲も力強くなる。小さく足踏みを繰り返すその姿がよい証拠だ。黒縁眼鏡の奥にある大きな瞳も、今は羨望の色に染まっている。

「えっと、あやちゃんのこと、わたしからも急かしてあげようか？」

「し、心配しなくても大丈夫だよ……あつ」

ぶりっ、ぶぶろう〜

「あ、あはは……ご、ごめんね」

まだ小学生の妹に心配されるとおり、楓佳の腸蠕動は活発そのもので、声を上げた拍子にガス漏れを起こしてしまっただけである。

「あー……その、頑張つてねふうちゃん」

とはいえ春香に何かできるわけでもなく、尻を揺らしそわそわしている姉に掛ける言葉はそれぐらいいしかなかった。

「彩花ちゃんっ、早めに済ませてねっ」

「ちよ、ちよっと、今し始めたばかりだよっ！ん、んんっ！」

ぶりぶりぶりみちみちみちちちっ！ぼちゃんっ！

閉ざされた扉の奥では、春香が残した便臭に、彩花のものの臭いが混ざっていく。春香がうんちを出した便器に、彩花もその健康固形便をひり落としていく……この一つだけの便器で、楓佳がすっきりでき

るのは何分後になるだろうか。

（やっぱり、トイレが一つだけだと朝は混んじやうよね……）

（わたしだって我慢させられたのに、急かさないでよねっ）

（ううう……二人が済ませるまでうんちできないなんて……っ！）

便器が各階に設けられているそのありがたさを、一つのトイレを交代で使わないといけない不便を身に染みて理解する春香と姉たちであった。

* * *

「春香も瑞希もあんまり好き嫌い無くて羨ましいよ。はあ、明日の給食はやだなあ……ピーマンとか好きな子いるのかなあ」

憂鬱を口にしながらも、いつも元氣いっぱいの子はいつだって明るく話す。彼女にとって給食のメニューは重要事項だった。

「わたしは、ピーマンの苦味とか、結構好きかも……」

静かで穏やかな子がおずおずと話す。自己主張は苦手であったが、親しい友人相手なら気軽に話せた。

「うっ……それが瑞希の成長の秘訣かあ。いいもん、今日だって牛乳おかわりしたし、たくさん食べたし、これから伸びるもんっ」

「まあまあ、成長期は人それぞれだし、瑞希ちゃんも去年と比べたらすごく身長伸びてるから。いつかわたしも抜かされちゃうかも」

春香は社交的で優しい子なので、友人のフォローは忘れない。性格の異なる三人が不思議と噛み合って、会話が続いていく。

十一歳の女子児童たちは、当然平日は朝から十五時半までを小学校

不器用で引っ込み思案な楓佳は外のトイレでうんちができずに大ピンチ
気が強くて意地を張りがちな彩花も下痢をすればしおらしく
しっかり者でいい子な春香がうんちの機会を逃し続けてお腹むずむず

そんないじらしい三姉妹の「大」事件と「大」ピンチを描いたお話を
十四万文字超・排便／脱糞カラーイラスト三点付きの「大」ボリューム
で収録しました。

「トイレトイレといれっ！ うんちもれちゃうっ!!」

「っ、お腹痛くて、我慢できないっ……トイレ、行きたいっ」

「おねがいはやくしてっ！ わたしもうんちしたいのっ!!」

「もうわたし、限界で、順番、代わって……っ」

小説 A J
イラスト 青緑

制作サークル
少女排泄表現開発事業団